

審査の結果の要旨

氏名 高橋 競

本研究は、世界に類をみない速度で超高齢社会になった日本における、失禁のある要支援・要介護高齢者の社会参加に心理的レジリアンスが及ぼす影響について分析した混合研究（量的研究および質的研究）である。量的研究の目的は、失禁のある要支援・要介護高齢者における閉じこもりと測定可能な心理的レジリアンスであるストレス対処能力との関連を明らかにすることである。また、質的研究の目的は、失禁がありながらも積極的に社会参加している在宅要支援・要介護高齢者のレジリアントな心理特性を分析することである。主要な結果は下記の通りである。

1. 量的研究では、千葉県君津地域において横断研究を実施した。質問票を用い、介護支援専門員 95 名による訪問調査を実施した。要支援 1・2 または要介護 1・2 の認定を受けた 65 歳以上の在宅高齢者 413 名より有効回答を得た。参加者の平均年齢は 82 歳であり、尿失禁または便失禁のあった者は 170 名（41.2%）であった。また、外出頻度が週に一度かそれ未満の閉じこもり状態の者は 144 名（34.9%）であった。
2. ロジスティック回帰分析の結果、失禁のある在宅要支援・要介護高齢者の閉じこもりと関連のあった項目は以下の 3 つであった。歩行に介助を要すること（調整オッズ比 3.05, 95%信頼区間 1.28-7.26）。トイレ動作に介助を要すること（調整オッズ比 3.77, 95%信頼区間 1.40-10.11）。そしてストレス対処能力（有意味感）が低いこと（調整オッズ比 0.74, 95%信頼区間 0.61-0.91）である。
3. 質的研究では、主題分析を実施した。量的研究の参加者のうち、失禁がありながらも毎日のように外出していた 11 名（女性 9 名、男性 2 名）が参加した。参加者の年齢は 70 歳から 90 歳であり、尿失禁のあった者が 7 名、尿失禁および便失禁のあった者が 4 名であった。

4. 主題分析により、積極的な社会参加に影響する5つの心理的因子（外出したい気持ち、失禁による心理的ストレス、他者と関わりたい気持ち、身体を動かしたい気持ち、失禁を管理できる自信）が特定された。積極的に社会参加するための基本的心理特性に「外出したい気持ち」があり、それは恥ずかしさや不安などの「失禁による心理的ストレス」により弱められていた。しかし、「他者と関わりたい気持ち」、「身体を動かしたい気持ち」、「失禁を管理できる自信」という3つのレジリエントな心理特性が、「外出したい気持ち」を促進していた。また、「失禁を管理できる自信」は、尿とりパッドやトイレなどの環境因子の影響を強く受けていた。

以上、本論文は失禁のある要支援・要介護高齢者の社会参加に心理的レジリエンスが及ぼす影響について、量的および質的研究法を用いて分析した点において独創的である。具体的に、ストレス対処能力（有意味感）、他者と関わりたい気持ち、身体を動かしたいという気持ち、失禁を管理できる自信といった心理的レジリエンスの重要性が示されたことは、失禁のある要支援・要介護高齢者の社会参加を促進していく上で重要な示唆を与えるものであり、学位の授与に値するものと考えられる。